日本の調停制度の歴史3

調停制度への警戒

日本における調停制度批判

三宅正太郎（1938）

事務的に堕した素人調停委員の手続は寒心に堪えない。

兼子一（1952）

戦争中の調停は、国民同士けんかしている場合でないから簡単にかたづけるという意識が強かった。

佐々木吉男（1974）

利用者は公正さを求め、調停委員は円満な解決を行っているつもりで、ズレている。

日本における調停制度批判(続)

田中成明(1994)

普遍法としての事実と規範によって論理的に正義を実践する方向を弱めるおそれ。

調停手続において、軽視されがちな法適用をいかに貫徹させるかという評価型的発想。